

2025.3
MARCH
No.27

高知大学医学部附属病院広報誌
隔月刊【おらんくの大学病院】

RANK

RANK

2025.3 MARCH No.27

高知大学医学部附属病院広報誌
隔月刊【おらんくの大学病院】

【発行日】2025年3月28日

【発行】高知大学医学部附属病院 広報係 〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮 Tel.088-880-2723

麻酔科は
「病院のインフラ」そのもの！
柔道経験が自身に与えた「挑戦をやめない」生き方
麻酔科 教授 河野 崇



高知大学医学部附属病院



<http://www.kochi-u.ac.jp/kms/hsptl/index.html>

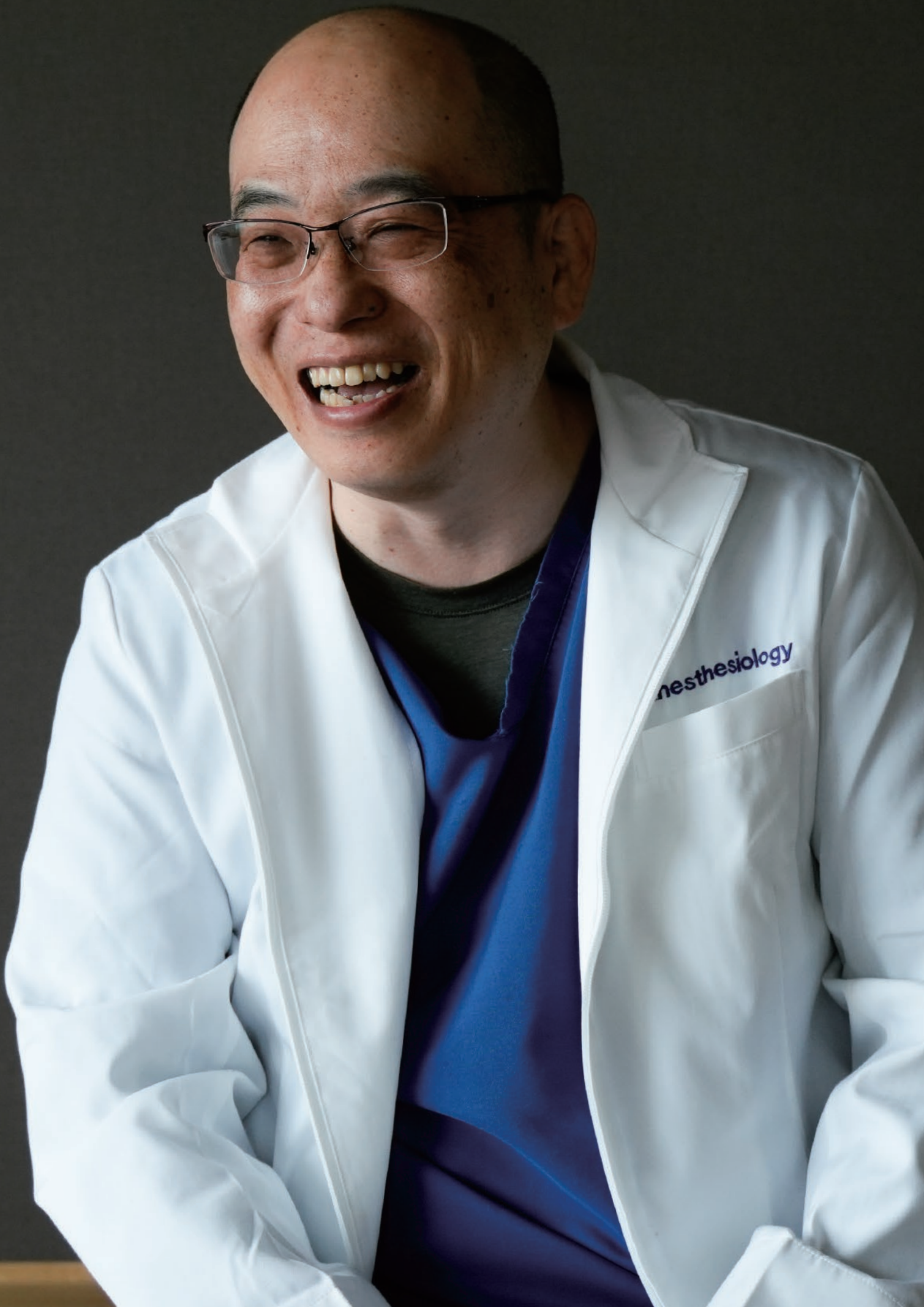


＼広報担当者のつぶやき／

第27号制作について打ち合わせをした際に、河野教授を一目見たベテランのカメラマンが「格闘技か…柔道かな」とポツリとつぶやきました。もちろん、その時点で私も含め河野教授が柔道に打ち込まれていたことは知りません。理由を聞いてみると「歩き方が違う」と言っていました。

そのカメラマン曰く、一つの競技・武道を長く続けている人は歩き方や所作が違って来るそうです。柔道に関しては、重心が低く少し前がかかり、と言っていました。そういった視点で見ると、第19号で取り上げた瀬尾教授(ラグビー)や第23号で取り上げた田村教授(サッカー)の立ち姿もそれぞれ違って見え、新鮮に感じます。

担当としては、そういった情報も含めて楽しんでいただける広報誌を制作していきたいと思います。



柔道から学んだ

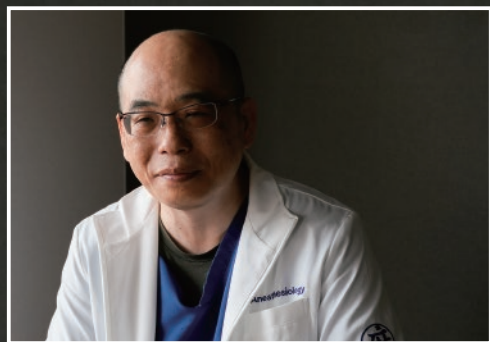
「状況を見極める力」

「最後まで諦めない粘り強さ」

まず、河野先生が麻酔科を志された理由から聞かせてください。

私が医師を志したのは、生命の仕組みをより深く理解し、人の命に直接関わる仕事がしたいと考えたからです。高校時代は発酵工学に興味を持ち、広島大学の工学部第三類（生物工学）に進学しましたが、次第に医療の世界に強く惹かれるようになり、決意を固めて高知医科大学（現・高知大学医学部）に入學しました。

いろいろな科を見て回り最終的に麻酔科を選んだのは、手術の安全を支え



る「影の司令塔」のような存在であることに魅力を感じたからです。手術中はリアルタイムで患者さんの状態が変化するため、常に状況を把握し、最適な対応をしなければなりません。この

冷静な判断力と持久力が求められる仕事。私が私の性分に合っていたんです。幼いころから柔道に打ち込んでいたんですが、その中で大事にしていたものが「守りの強さ」と「粘り強く対応する姿勢」です。私は相手の攻撃を受け流しながら、粘り強く試合を進めるタイプでした。麻酔科医の仕事も、手術中のさまざまな問題に対して瞬時に適切な対策を講じながら、患者さんの命を守ることを求められます。そうした点で、柔道で培った「受けの強さ」が、今の仕事にも生かされていると感じています。

柔道を始められたのはいつ頃からですか。

幼少期に近所にあった名門の柔道場に通い始めたのですが、私は非常に臆病な性格で、投げられるのが怖く、どうやったら相手に倒されずに済むかわかりを考えていました。その結果、自然と「受け（守り）の強さ」を武器にするようになりました。

人より練習量を多くすることで、徹底的に持久力とスタミナを身につける

ことができ、相手にも自分にも根負けしない精神が培えていたのです。

試合、特に団体戦では相手のポイントゲッター（本勝ちを狙う選手）を引き分けに持ち込む役割を担い、レギュラーとして起用されることが多かったのですが、この経験は麻酔科医の仕事にも通じるものがあります。麻酔科医は、外科医のように全面に立つ役割とは異なり、手術というチーム戦の中で患者さんの安全を守るために冷静に対応し、最善の結果を導く存在です。柔道を通じて学んだ「状況を見極める力」「最後まで諦めない粘り強さ」は、現在の医療現場でも私の大きな武器となっています。

「麻酔科医は病院のインフラである」という言葉を耳にしますが、この言葉についてどう思われますか。

まさにその通りで非常に、的確に射た言葉だと思います。麻酔科医がいなければ、多くの手術は成立しません。手術室が止まれば、救えるはずの命が救えなくなる。それだけではなく、集中治療室（ICU）や救急医療、ペイン緩和医療といった多くの領域において、麻酔科医は患者さんの安全を支える最後の砦となっています。

とは言え、麻酔科医の仕事は目立ちません。私たちは手術が始まる前か

麻酔科は「病院のインフラ」そのもの！

柔道経験が自身に与えた「挑戦をやめない」生き方

麻酔科の仕事は何かと問われれば、多くは、周産期の痛みや刺激を和らげるための医療技術と答えるのではないだろうか。本院でまもなくスタートする無痛分娩でも麻酔科の活躍が期待されるところだがその役割は手術全般における患者さんの命を管理していると言っても過言ではない。麻酔科医不足に対する要望の声が高まりつつある現在、本院においてもどのような体制で最適な麻酔方法を実践しているかは、実に興味深いところだ。今号では本院麻酔科 河野崇教授にフォーカスし、麻酔科の現況と今後への思いを語ってもらった。

ら患者さんの状態を把握し、術中は血圧、心拍、酸素飽和度、体温など、あらゆる生理学的パラメータをリアルタイムで管理していますし、手術が終わった後も、患者さんが覚醒し回復するまでしっかりと見守る。それでも、多くの患者さんにとって、私たちは「いつの間にか眠らされ、いつの間にか目が覚める」存在でしかありません。

しかし、これは麻酔科医が当たり前のように「安全」を提供し続けているからこそ成り立っています。水道や電気のように、普段は意識されないけれど、止まれば一瞬で大混乱に陥る。それが麻酔科医の存在です。

麻酔科医は、ただ患者さんを「眠らせる」だけではありません。術中に血圧が急低下したら、それを即座に是正する。予期せぬ出血が起これば、循環動態を安定させるために薬剤や輸血を駆使する。手術中に心肺停止に陥った場合は、迷うことなく蘇生を行い患者さんの命をつなぐ。これらはすべて外科医が安全に手術を進められるようにするためにあり、患者さんの生命を守るために不可欠な役割です。

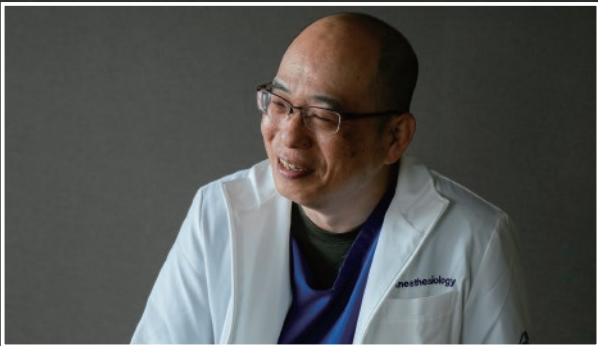
また、手術室だけではなく、麻酔科医はICUの患者管理にも深く関わっています。人工呼吸器の管理、重症患者の循環・代謝管理、鎮静や鎮痛の調整。これらも麻酔科医の専門領域です。さらに、救急外来での緊急対

ため麻酔管理には特に慎重なアプローチが求められます。当科では高齢者麻酔の安全性向上を重視し、慎重に各診療科と連携しながら、患者さん一人ひとりに最適な麻酔管理を提供する体制を整えています。また、次世代の麻酔科医を育成するため、周術期管理実習や症例検討会を通じて、学生や研修医が実践的な経験を積める環境を作っています。さらに、麻酔科の仕事の魅力を伝え、より多くの若手医師がこの分野に興味を持ち、全国的な麻酔科医不足の解決にも貢献できるよう努めています。

最後に、
今後の展望について
お聞かせください。

今後、麻酔科全体として、さらに高度な医療を提供できる体制を整えて行くことが重要だと考えています。まず、周術期管理の質を向上させるために、新しいモニタリング技術の導入や、人工知能（AI）を活用した麻酔管理システムの開発にも取り組んでいきたいと考えています。

また、麻酔科医不足の解消に向けて、若手医師の育成と働きやすい環境の整備を進めていきます。麻酔科研修プログラムの充実を図り、専門的な知識と技術を持った医師を継続的



応、ペインクリニックでの慢性疼痛管理など、私たちの手が届く範囲は広がっています。

麻酔科医は、

チーム戦を勝利へ導く

「縁の下の力持ち」で
なければならぬ

柔道に例えるなら、私は「派手に二本を取る選手」ではなく、「チームの勝利のために相手の攻撃を受け止め、粘り強く戦い抜く選手」でした。麻酔科医も同じです。手術というチーム戦の中で、決して目立つことは

ないかもしれませんが。しかし、誰かがその役割を果たさなければ、手術も救急もICUも成り立たない。そういった意味でも麻酔科医はまさに、病院を支える「縁の下の力持ち」であり「インフラ」そのものなのです。

だからこそ、私は麻酔科医の重要性をもっと多くの人に知ってもらいたいと考えています。患者さんにとってはもちろん、医療に関わるすべての人々にとって、麻酔科医がどれほど重要な存在なのかを伝え、「病院に麻酔科医がいることが当たり前」という常識を、次の世代にもつなげていきたいと思っています。

高知県で人生の半分を
過ごされてきた先生が
捉えた県内の医療状況や、
本院麻酔科が目指す
方向性などについて教えてください。

私は徳島県出身ですが、医学生時代を高知で過ごしました。卒業後は徳島大学麻酔学講座に入局し、しばらく研究や臨床に従事していました。が、平成22年に母校に講師として赴任し、高知県の医療に向き合うこととなりました。

高知は全国的に見ても高齢化が進んでおり、手術を受ける50%以上が高齢患者さんというのが現状です。その

今後、麻酔科が病院のインフラとして機能し続けるために、教育・研究・臨床のすべてにおいて革新を続け、次世代の医療を支える礎を築いていく所存です。

教授
河野 崇 (かわの たかし)

【経歴】
1998年 高知大学医学部 卒業
2002年 徳島大学大学院医学研究科 修了学位取得(甲医第697号)
2007年 米国ウイスコンシン医科大学 麻酔科 Research fellow

1998年 徳島大学医学部附属病院 麻酔科
1998年 高松赤十字病院 麻酔科
2002年 徳島大学医学部附属病院 麻酔科 助教
2010年 高知大学医学部附属病院 麻酔科 講師
2017年 高知大学医学部 麻酔科学・集中治療医学講座 准教授
2020年 高知大学医学部 麻酔科学・集中治療医学講座 教授
現在に至る

【専門分野】
麻酔・集中治療・ペイン

【専門医等資格】
麻酔科標榜医、日本麻酔科学会(指導医)、
日本ペインクリニック学会(専門医)、
日本神経麻酔・集中治療学会(指導医)、
日本区域麻酔学会(暫定認定医)



西日本医科学生総合体育大会(名古屋)にて団体準優勝(1995年／写真左端)

自分の志した
道ならば、
積極的に取組んでこそ
自分を
納得させられる！

学生たちに指導しながら考えるのは、学習環境も考え方も我々の時代とは大きく変化しているということ。強制することが難しい時代に育ってきた皆さんは、恐らく教師から怒られた経験もなく、嫌だったら来なくてもいいし、やらなくてもいい環境下にあります。しかしそれを百歩譲って良しとしても、せっかく志して進んだ道ならば、積極的に取組まなければつまらないし、勿体無い。そうするべきだと私は思います。

自分の大学院生時代を振り返ると、誰もやらない砂粒の中の1個を探し出すような研究を延々と続け

ていました。それは私自身のスタイルであり生き方でもありました。医学であろうが何であろうが納得できる答えが出るまで向き合い続け、やり尽くして良しとするという考え方は、最近の学生さんにはかなり少ないタイプの人間です。

人生は
トライアンドエラー
自分を信じ、仲間を信じ、
常に前だけを見て進め！

医学生或いは
後輩の医師たちへ

私の人生は幼い頃からトライアンドエラーで進行していて、常に新しいアイデアに飛びついてしまう傾向があります。それに対してどうしても駄目だと判断したら、即座に撤回する。挑戦する勇気と止められる判断力があれば、志ひとつで理想の快適な環境を自由に作り上げることができる、ということをぜひ覚えておいてください。

「無痛分娩」という、
麻酔科×産科婦人科の
新しい挑戦！

麻酔科医は医師の2%程度しかおらず、長きにわたり人材不足で

す。とはいえ仕方ないと悩んでいるわけもなく、立ち止まることを知らない私は、あらゆる医療機関の研修医を持ち前の粘り強さでしつこく口説き落としました。その結果、素晴らしい麻酔科医が、高知大学に集結したのです。

折しも2025年度から、本院でも、これまでの選択肢になかった無痛分娩に関する基盤構築プロジェクトがスタートします。麻酔科が高知県の医療に貢献できる素晴らしい機会でもあります。新しい医療を始めることにはちゃんと意味があり、その意味を伝えていくのはそのプロジェクトに関わる私たちで、答えを出すのも私たちです。

若い医師たちが麻酔科のドアを叩いてくれるのを我々は期待に胸を膨らませて待っています。どうか躊躇せずトライしてほしい。失敗は後々のあなたの大きな糧となり強い精神をもたらしてくれるに違いありません。

高知大学麻酔科の新たな挑戦に、「ぜひ私も！」と手を挙げてくださるあなたと、医療の未来を築いていきたいと願っています。

